

埴谷雄高著

橄欖と瑩窟

未來社刊

橄欖と壁窟

定価 六八〇円

一九七二年六月二〇日 第一刷発行

一九七二年六月三〇日 第二刷発行

著 者 埴 谷 雄 高

発行者 西 谷 能 雄

東京都文京区小石川三の七

発行所 株式会社 未 来 社

電話(八一四)五五二一代表

振替東京八七三八五番

落丁・乱丁はおとりかえします

萩原印刷・今泉誠文社

橄

欖

と

瑩^{カタ}

窟^{コム}

目

次

序詞

想像力についての断片……………	九
『闇のなかの黒い馬』を語る……………	一九

I

存在と想像力……………	三
想像力の操作……………	六
思索的想像力について……………	七
存在と革命……………	七
記録型の芸術と渴望型の芸術……………	八
存在の文学……………	四
絵画と小説の婚姻……………	一〇
「難解」と私……………	一五

II

高橋和巳君をいたむ……………	一一
破局への参加……………	一四
小さな生の焰……………	一五
穴のあいた心臓……………	一三

『悲の器』の頃……………	一六
妄想、アナキズム、夜桜……………	一四
断片的な回想……………	一四
高橋和巳をしのんで……………	一五
「序曲」の頃……………	一七
日沼倫太郎君を悼む……………	一七
瀬田栄之助君を悼む……………	一八
森谷均への弔辞……………	一八

III

見えすぎる洞察者……………	一七
廃墟からの出発……………	二〇
野間宏『青年の環』……………	二九
『夢十夜』について……………	三五
ドストエフスキイと私達……………	三六
三つの映画『白痴』……………	三一
生かされた「重い味」……………	三四
アフォリズムの由来……………	三七

IV

「夜の会」の頃の渡辺さん	二五
招かれざる酒客	二六
国士竹内好	二六
匂いと色と響き	二五
不思議な哲学者	二五
青年辻邦生	二五
現代の行者、小田実	二六
古賀剛のこと	二六
「農民闘争」の友人達	二六
永原幸男の想い出	二六
島尾敏雄『硝子障子のシルエット』跋	二六
森泉笙子『危険な共存』跋	二七
「文芸」と私	二七

V

クービンの絵に寄せて	二七
キェルケゴール『あれか、これか』	二八
宇宙型と神人型	二八

野蠻人型……………	二五
心電図の波……………	二六
不眠と深夜放送……………	二六
大 長 征……………	二九
サリヴァン先生……………	三〇
セキセイの告示……………	三〇
茫々二十年……………	三〇
運命的なシリーズ……………	三七
あとがき……………	三一

橄

欖

と

瑩^{カタ}

窟^{コム}

序詞 I

想像力についての断片

＊

時間と空間が宇宙をいれる容器であるごとくに、想像力は生の全体をいれる容器である。想像力なしには、私達の生の一瞬も、死の永劫もなりたない。個体と個体が向かいあつて高く叫んでいる声も、深夜目覚めているものがひとり向きあっている聖なる文字も、そこに真実が伝えられていると信ぜられたときにはそこに想像力が働いたときである。従つて、また、こうも苛酷に言い換えることができる。そこに想像力が働いている私達の生のさなかにおいては、私達は、つねに、真実と迷妄の境に光と燃えがらを共有して立つている、と。

＊

私達の生の推移は、二十億年前ひとつの単細胞を与えられた神の一実験にほかならぬ。けれども、これはまことに奇怪なことであるとはいえ、二十億年前

与えられたひとつの単細胞を胚種とした神の一実験より、さて、白紙の上にひとつの胚種を置かれた私達の想像力のほうがより大きな幅と、それにともなうより大きな困難と、そしてまた、より大きな愉悅を負わされているといわねばならない。その苦悩は、僅か二十億年かけた一実験ではなく無限の空間と時間という枠を与えられて、《無限の実験》を強要されときの神の途方にくれた事態と似ているけれども、しかもなお、その仕事の窮極は、もし工夫をこらせば、神にも許容されていないところの一瞬と永劫、実在と虚在、創世と死滅を同時に併記できるところの白紙のみが保ちもつ《仮象の幅》の奇蹟によつて、優位を保証されているのである。これを敢えて換言すれば、この宇宙と存在のなかにおいてより神的なものは、むしろ、私達が仮象の工夫をこらし得るところの想像力といわねばならないのである。

＊

この現実と同じような厳密な条件の設定、それは想像力を規制する場所でない

く、想像力を単なる空想ではなく、まさに想像力たらしめる条件である。そして、不可能なものを見てしまう恐るべき無気味な条件を自らに設定し得るのは、想像力しかない故に、まさに、想像力はひたすら不可能へ向かわざるを得ない。そして、この種のいわば想像的思索、或いは思索的想像というべき窮極の想像力のかたちを私は推論式と呼んでおく。

＊

夢、想像力、推論式——これは、眠つていても覚めていても絶えず考えつづけている私達が辿りゆく三つの必然的な階梯であつて、いつてみれば、可能から不可能へ向つて進みゆくところの思想が敢えてひきうけた冒険の幅がそこに示されている。眼前に与えられた事物を分析して或る種の真実を明らかにするというより、眼前に存せぬ何かをまざまざと見てしまうこの操作は、存在がやがて向うべき窮極の努力の方向にある怖ろしい真実を宇宙と存在にあらかじめ啓示しているかのごとくである。

もし時間と空間が宇宙の枠であるとすれば、想像力は生を容れる枠である。そこに二人の生きた人間がいれば、想像力なしでは向きあえないけれども、たった一人でいるものもその存在の最後の保証は想像力のみがなしとげるのである。街角を曲つていつたものの行方や、向きあつてゐるひとの心の中や、未生以前の自己のかたちや、宇宙の真暗な箱のなかで生起しつつづけてゐる不思議な秘密など、見れないものを見ようと思つたとき、私達のなかに或る不思議な、果てもなく長くのびるところの暗い触手が撞げられはじめ、そして、それは私達の関心の度合に応じて、向きあつたものの謎にも似た一瞬の微笑の意味からこの宇宙と存在の窮極のかたちまで追い求めつづける。しかも、私達の関心には歯どめを備えた節度などないのであるから、さながら宇宙創世にも似た条件を設定する絶妙な工夫をこらしても、見ようとしてとうてい見れないところの禁断不可触、絶対不可能なかたちをも見てしまうところまでいたらねばやま